

ふるさと御所 文化財探訪

其の三

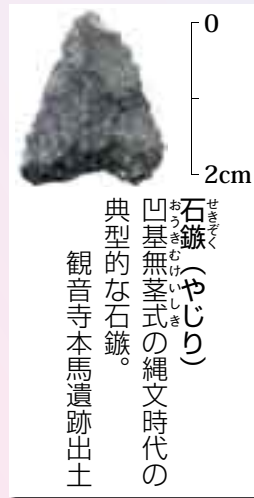
縄文時代〈1〉

生涯学習課文化財係
☎内線696

氷期（いわゆる氷河時代）は約1万2千年前によくやく終わり、次第に温暖になっていきました。およそ7千年前から4千年前にかけては現在よりも温暖で、ピーク時には海面は3～5m程度も高く、これを縄文海進と呼んでいます。

縄文時代は氷期の終わりと時をほぼ同じくして始まり、今からおおよそ3千年前まで続きます。縄文時代は土器の発明によりその前の旧石器時代と区分されますが、土器に加え弓矢の発明は狩猟採集による生活を画的に豊かにし、定住生活を可能にしました。つまり、土器は採集した堅果類（ドングリやクリなど）を煮ることににより植物性タンパクの、弓矢は動物を能率良く狩

りできることにより動物性タンパクの、それぞれの供給量を大きく増やすことを可能にしたからです。



石鏃（やじり）
凹基無茎式の縄文時代の
典型的な石鏃。
観音寺本馬遺跡出土

また、温暖な気候は、縄文中期（約5千年前）の、とりわけ東北～甲信越地方に豊かな自然の幸をもたらしました。例えば、青森県三内丸山遺跡は直径にしておよそ500mにも達する縄文時代最大の集落で、クリの栽培などにより多くの人口を賄うことができたこととみられています。また、東京都中里貝塚では幅100m、長さ500m、厚さ4m以上にも達する貝層が知られ、しかもそれは旬の季節に採れたハマグリとカキのみで形成されていたというから驚きです。これらは加工して交換財にされたとみられています。

こうした生活の余裕は、精神性を豊かに発達させました。立体的かつ複雑に口縁部を飾ることで有名な火焰土器も、この時期の甲信越地方の産物です。「豊かな縄文時代」とは、まさにこのようなものを指すわけです。

しかし、縄文後期（約4千年前）になると、気候変動をはじめさまざまな要因からこの豊かさにも翳りが見え始

め、大集落は解体し、分村化してゆることが知られています。一方、西日本の縄文文化は、中期までは亜熱帯に近い気候であったためにやや低調ですが、後期に入るころから少し活性化します。小林遺跡は、この時期（縄文中期末～後期初）の御所市内の遺跡です。小林遺跡では、幅50cmほどの急流の小河道の周りに小屋を設けた石器製作場が見つかっています。出土遺物にはサヌカイトを荒割りした石器素材、荒割りに使ったとみられる楔形石器や叩石と台石、縄文土器片などがあります。このほか御所市内の縄文後期の遺跡としては、玉手遺跡や櫛羅遺跡が知られています。

小林遺跡の石器加工場（東から）



編集後記

雨降りの続く梅雨の時期は、どうしても室内に閉じこもることが多くなります。そんなとき欠かせないのがオーディオです。雨だれの音をBGMに聴く楽曲は、ハイドンの弦楽四重奏曲やモーツァルトのクラリネット五重奏曲など、やはりサクッと心地良く聞ける室内楽が主になりますが、J・S・バッハの口短調ミサ曲やマタイ受難曲のような普段段々じっくり聴けないような長大作品を落着いて聴くにも好適な季節であると言えるでしょう。いずれにしても、日ごろ見向きもされずラックの隅で眠っている不遇のCDたちが、ようやく日の目を浴びる目覚めの季節でもあります。(久)



2008.

7